

最近よく、生物多様性保全の視点から、外来種が問題にされます。外来種の多くが、人為的に持込まれた先で定着することにより、その土地の様々な在来生物の存続に深刻な影響を及ぼすからです。この問題は近年、人の手によってより多くの生き物が生きのまま国外から持込まれ、あるいは国内で持ち運ばれるようになると、特に目立つようになりました。

長寿の象徴として尊ばれ、またペットとしても人気のあるカメも例外ではありません。1960年代以降、日本各地で放逐され定着した結果、今やまったくいない河川や池を探す方が難しくなってしまった観のある北米原産のミシシッピアカミミガメや、近年になって千葉県や静岡県で定着していることが判明し、他の地域でも繁殖が懸念されるカミツキガメなどはその代表で、摂食や捕食を通じた在来の水生動・植物への影響が懸念されています。

そして昨今問題視されるようになったのが、長く在来種と信じられていたクサガメです（写真 1）。明治期より前に著された古文献中でのカメに関する記述や、カメを扱った古い絵画に見られる特徴、遺跡・貝塚などから出土するカメの甲羅や骨格残骸の同定結果、そして DNA レベルでの国外産個体との比較検討の結果を総合すると、クサガメはもともと日本には生息していなかったことが示されたからです。とはいえ最初に持込まれた時期は江戸時代ないしそれ以前と思われ、従って環境省の定義する外来種（明治時代以降に持込まれた種）には含まれません。なぜ今になって問題視されるのでしょうか？

最大の理由は、かつてあまり見られなかったニホンイシガメ（日本の固有種）との雑種個体（通称ウンキュウ）が、ここ二・三十年、野外で随分目立つようになって来たことと関係しています（写真 1）。DNA を指標とした最近の研究では、こうしたウンキュウの中には両種の雑種第一代だけでなく、親種との戻し交雑や雑種同士の交雑を経て生じた第二代以降の雑種個体も含まれていることが示されました。このことは雑種第一代が、例えばウマとロバの雑種ラバなどと違って生殖能力を備えており、従って野外でのクサ

ガメとニホンイシガメの雑種化が進行した場合、最悪、純粋なニホンイシガメがほとんどいなくなってしまいう危険性を示唆しているのです。

この問題、クサガメがこれまで在来種として大事にされてきたことや、原産地とされる大陸、朝鮮半島で軒並み絶滅が危惧される状態にあることもあり厄介ですが、科学的知見にもとづいて急ぎ適切な対策を進める必要があります。

太田英利（自然・環境評価研究部）



写真 1 ニホンイシガメ（上）、クサガメ（中）、そして両者の雑種個体（ウンキュウ：下）の頭部側面

ウンキュウの頭部の色調や模様には、両親種のものの特徴が入り混じっている（写真提供：鈴木 大）。

ひとはく通信

ハーモニ

88

Mar. 2015

特集 ボルネオ島、 熱帯雨林の今

熱帯雨林特有の板根（ばんこん）を有するフタバガキ科植物
ボルネオ島のマレーシア・サバ州タナムバレー自然保護区にて